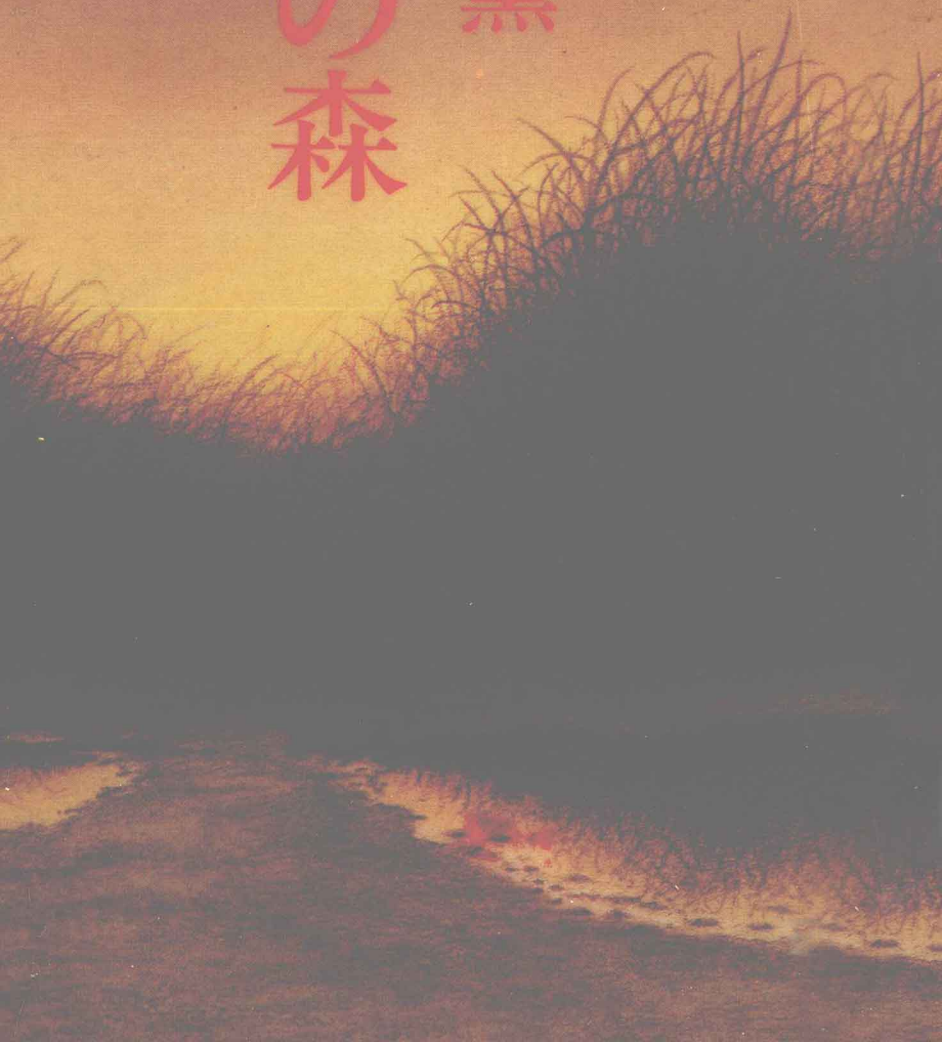


古川薫
暗殺の森



古川 薫

暗殺の森

講談社

暗殺の森・

昭和五十六年十一月十六日 第一刷発行
昭和五十七年三月三十一日 第二刷発行

定価 一一〇〇円

著者 古川 薫

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二二郵便番号/一二二
電話・東京(〇三)九四五―一二一(大代表)
振替・東京 八―三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

©古川 薫 一九八一年 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えます。

暗殺の森 目次 ●

第一章	砂丘の墓標	5
第二章	蛇 蝎	29
第三章	長府城下	57
第四章	落日海岸	89
第五章	悔恨の村	164
第六章	墨魚の史書	195

装帧／涉川育由

暗殺の森

第一章 砂丘の墓標

1

季節風による飛砂が降り積つて、綾羅木浜あやらぎはまとよばれるこの海岸一帯には、遠い先史時代から、いくつかの小砂丘ができあがっている。少女の乳房を思わせる、低い砂のふくらみの一つを選んで、頂上に年若い公卿の遺体が埋められたのは、七十年前のことであつた。墓のそばから、ひよろ長い松の木が数本、日本海の潮風に押されて傾いた幹を高く伸びあがらせ、泳ぐような手つきで枝をひろげていた。

——藤原忠光卿神霊

と刻んだ花崗岩の碑面が、海に向って、わずかに風化している。前日の雨を吸ってしつとりと湿りを帯びた砂地に、その若者の墓は、細い孤独の影を落としていた。それは、貴賓が展墓するといふので、めずらしさも手伝って集まった百人ばかりの市民でにぎわうこのような日でさえ、いつもと変わらぬものがない風景だった。

その日——昭和十年四月十一日は、早朝の霧雨もやんで、貴賓到着の予定時刻午前十時すぎには、すっかり晴れあがった。

野見庄太郎は、墓域から少し離れたあたりに群がる一般参列者にまじり、やがて見られるはずの、ある劇的瞬間を待っていた。彼は馬関時事新聞社の社長という肩書きを持つ五十年配の巨漢だが、記者も兼ねた。記事は野見の宿酔ふつかよひで濁る頭の中に、少しづつ形をなしつつあった。

「下関市外綾羅木に鎮座する中山神社祭神中山忠光卿、田耕村にて凶刃に殛たづれられたとき侍女登美女とみじな妊はらめるあり、豊浦郡長府町ちよふにて生まれたるが後ちの嵯峨侯爵夫人仲子の方である、今回随行の八人と共に来関、十一日午前十一時中山神社に参拝あり、境内に祀まつれる忠光卿の墓前にも玉串を奉奠ほうてん、さても感慨深き面持ちで……」

野見は、「田耕村にて凶刃に殛れ」というくだりで首をかしげ、そこを「元治元年冬、この地で絶命」としておいたほうがよいかと少しの間迷った。つまり殺されたとせず、絶命と言葉をばかすべきかどうかを考えたのである。この記事が載った新聞を東京の毛利家に送るつもりなので、思案を要する部分だった。

（いや、最初から凶刃に殛ると書いておけば勝負が早いかもしれんな）

と考えたが、またそれを打ち消してしまふ。ついには面倒になり、帰ってから原稿にむかうとき、ゆつくり工夫することにした。

砂利を踏む大勢の足音がしたのでふりかえると、嗟峨仲子の一行が鳥居をくぐり黙々と社殿に歩み寄るところだった。野見は、銀鎖をつまんで、チョッキのポケットから懷中時計を取り出し、濃い眉の下に開いた、そこだけがまるで少年のようにもあどけない感じの二重瞼の目を細めてそれを見た。午前十時半だった。鳥居横の松林の中に、黒塗りの自動車が二台停めてある。

仲子は下関市岬之町はなのまちの大盛館に投宿している。前日参拝の予定を、雨のためきょうに延期したのが、野見にはちよつと不満だった。血肉を分けた人の墓参を雨でとりやめるとは考えられず、彼は前日もこの時間にやってきたのだ。

宮司みやじの読む祝詞のりとが聴こえてきた。拜殿での儀式は三十分ばかりも続き、ほっとした表情の人が眩しそうに目を細めて、日ざしの中にあらわれた。宮司の先導で、一行は社殿から五十メートルばかり東にある墳墓へ向かう。人々より二、三步先を歩いている小柄な和服の貴婦人が、仲子だということはすぐにわかった。彼女は、なだらかな砂の斜面を、うつむき加減に登って行く。野見は、身を乗り出すようにして、それを見守った。

かつては仲子姫といわれた人も、今はすでに七十歳という老境に達している。二十歳で死んだ父親の墓の前に立ったその心境はどのようなものであろうかと、野見はいくらかの好奇心もまじえながら、仲子の姿をながめていた。

仲子が、玉串を墓前に奉奠するとき、宮司は一首の歌を朗詠した。初めは低く、また甲高く澄んだ調子で、なかなか聴かせるものだった。

思ひきや野田の案山子の梓弓

引きも放たで朽ちはつるとは

忠光の辞世である。突然のことでもあり、最初のうち芝居じみてはいたが、かすかな潮騒と共に、しみ入るような声でくりかえされる歌の意味が、少しずつ人々の胸をひたしはじめた。仲子は跪いて、朗詠の終るのを待っている。

期待した通りの光景を目の裏におさめて、野見は満足し、曇った頭を拭き払われたように何度もうなずいた。

「天誅組の主将たりし貴人、追われて長州の奥深く人里遠く離れた地に無念の死を遂げし父親の墓前に、泣き崩れる仲子刀自の姿は参列者の涙を誘い七十年の歳月は一瞬の過去となりて、悲しみはまた烈しき怒りを呼び起した」

彼は記事のつづきを、そのようにも書くつもりである。

仲子の一行は、再び宮司に導かれて、こんどは砂丘から海辺に降りて行った。野見庄太郎は、若いころ草相撲の横綱にもなったという大きな背中を一般参列者に見せて、足早に貴賓たちのあとを追った。

「ここは時ノ浦とも申します」

宮司がゆびさしながら説明している。日本海の一部にあたるその響灘は晴れわたった空を写

して、濃い群青に染まっていた。仲子は、黙って沖をながめている。

「では社務所にてご休息下しますように」

宮司にうながされ、砂浜を引き返してくる仲子に、野見は近づいて行った。

「嵯峨侯爵夫人、少しばかりお話を聴かせていただけませんか」

彼が野太い声で言う、と、宮司は仲子を庇^{かば}うようにして立ちふさがり、

「無礼はなりません」

と、慌てて制止した。

「どなたじゃ」

仲子は歩みを停め、穏やかな威厳をこめて言った。

「地元の新聞社の者ですが。お父上の死を刀自はどう思われますか」

「どう思ふかと？」

年齢より若やいで見える仲子の面長の顔が、いっしゅん引き締まった。

「死因についてでありますよ」

「これ、無礼でありましょうぞ」

宮司がさえぎるのを、仲子は目で抑えた。

「死因に疑惑があるのをご存知でしょう」

「父の死因でございますか」

「左様、忠光卿の死因は、長府藩によれば病氣とされておりますが、暗殺されたことは、この

地方で公然の秘密となっています。あなた様はどのように聞いておいでか、それを伺いたいの
であります」

「もう七十年も昔のこと、今さら詮議しても仕方ないでしょうに」

「七十年であらうと百年前であらうと、はっきりさせておかねばならぬことがあります。刀自
もご存知のように、忠光卿は権大納言中山家の御曹司、おそれ多くも明治大帝の叔父にあた
せられます。そのようなお方の墓が、なぜこの綾羅木にあるのか、また死因を病氣と言い、暗
殺との噂もあり、疑惑につつまれたまま今日にいたっているのを、よしとは申されすまい」

「お前さまは、それを確かめようと」

「必ず確かめてごらんに入れます」

「そしてどうなさるおつもりじゃ」

「新聞に書きます」

「……………」

「真相を暴露して、せめて忠光卿の仇を報じたいのであります」

「仇を報ずる……」

仲子は、いっしゅん笑ったが、すぐ真顔にもどり、

「お前さまは、何かゆかりのある方ですか」

と、野見を凝視^{みつ}めた。

「直接の縁とはいえませんが、私の父は奇兵隊士でありました。刀自が長府の江尻家で、御母

上登美様の腹から生まれられた直後、母娘おやとの身柄を奪い、吉田の奇兵隊本陣に保護したときの隊士の一人。そのころのことを、私は幼少のとき父からよく聴かされておりました。忠光卿は殺されなされたのだと。そして、あなた方母娘の命も危かったのですよ。忠光卿暗殺の手下人はだれか。七十年間、それはずっと隠されてきた」

「隠さなくてはならぬ理由があったのでございましょう」

「だれのための理由でありましょう」

「お前さまは、それをわたくしに言わせたいのですか」

「いや、別にそれは……」と野見は口ごもり、そして目を据えて言った。「刀自はお小さいとき、登美さまから、そのあたりのことについて何かお聴きになったはずであります」

「聴いたかも知かりませんが、忘れました」

「左様ですか……。大変ご無礼を申しあげました」

薄笑いを泛べ、立ち去ろうとする野見を、

「お待ちなさい」

と、仲子が鋭く呼び止めた。

「明治二十年ごろでしょうか、母が中山家に参りましたとき、侯爵様から尋ねられて答えた記録を見たような気がいたします。その写しは当中山神社にも保存してあると聞いていますか……」

「ありますか」

野見は、官司にむかつて言った。

「探してみないとわからんが」

官司の兼富忠一は、鼻下にたくわえた髭をまさぐりながら、迷惑そうに答えた。

「そのような大事な文書を、まさかお宮が紛失したとは思えませんな」

「それはそうだが……」

「見せていただきたい」

「いずれにしても今日は、侯爵夫人もご滞在のことではあるし、あんたの相手をしている暇はない」

「では三日後に直して参りましょう」

「うむ」

わずかに頷いて、兼富官司は手で払いのけるような身振りを示し、着崩れた背広姿のこの新聞記者に退去をうながした。

2

野見庄太郎が、再び中山神社をおとずれたのは四月十四日の午後である。

彼は拝殿の前まで行つて、まず鈴を鳴らした。鳥打帽を脱ぐと、オールバックにした豊かな頭髪があらわれる。深々と頭を垂れ、髪を掻きあげるようにして、大きく胸を反らし、柏手かしこを

二つ打った。それから墳墓のほうに歩きだした。窓ガラス越しに、兼富宮司が窺うような視線をむけてくるのを、わざと無視して社務所の前を大股に通り過ぎ、砂丘の上の墓標の前にしばらく佇んだ。

社務所に引き返し、お守札など売っている窓口から声をかけた。先程までそこにいたはずの宮司は姿を消している。二、三度呼ぶと奥からのっそりと出てきた。

「玄関からお上がりなさい」

と、宮司はやはり不機嫌な声で言った。

「恩地登美さんのあれを拝見させて下さらんかの」

言いながら、野見は玄関にまわり、式台に腰をおろして靴を脱ぐと、無遠慮に上がって行った。玄関横の応接間に案内され、まずゴールデンバットに火を点ける。野見の吐き出す煙で、狭い部屋の中には、たちまちヤニ臭い空気が充満した。

「見せて下さらんか」

もう一度言った。

「仇を報ずるなどというあんたの言葉が少し気になるのじゃが」

と、兼富宮司は、相手を睨むようにして言った。野見と同年配らしいが、髭を生やしているのも、もっと老けて見える。

「はは、あれですか。別に他意はない。忠光卿の最期についての真相を解明すること即ち仇討ちではないですか。今は文明社会ですからな。ダンビラを振りまわそうちゅうのではない」

「それはわかっておるが、あんたは誰かを傷つけようとしているように思えるのじゃ」

「傷つく者がいるのですかな」

野見は煙草を揉み消しながら、低い声で威嚇するように、さらに言葉をついだ。

「先程から聞いちよると、宮司さんは真相を公表することに反対のようだが、何かわけがあるのですか」

「そのようなもの、あるはずがない」

「それはそうでしょうな。何しろ中山忠光卿は、文久三年の天誅組てんしゅうぐみの乱に失敗し、幕吏に追われて長州に逃げてきなさった。敗れたとはいえ、討幕義挙の先駆をなすものだ。これが維新の大業達成に、重要な意義をもったことは、すでに人の知るところ……」

「そのことは、あんたに教えてもらうまでもない」

宮司は鷹揚に笑って見せた。

「いや、失礼ながら兼富さんは、あまりわかつちよられんようだ。今日なぜ忠光卿が神としてここに祀られておるか。長州で客死した公卿はほかにもおりますぞ。山口には都落ちした七卿の一人錦小路の墓がある」

「なるほど」

「中山神社が創建されたのは、天誅組の評価とは別に、忠光卿がこの地で無残に殺されたからだ。誰に殺されたかはわからない。いやわかつちよるのだが、それを覆い隠そうとして、病死などと嘘報を流してもきた。ほかに真相を糾明する者がおらなければ、中山神社の社司、社掌